

「地域学総説」の挑戦5

柳原邦光*

The Challenges of Teaching the Theory of Regional Sciences: Part V

Kunimitsu YANAGIHARA

キーワード：生の充実，わたし，社会的結合，生きられた空間，移動，当事者，生活の知
Key Words：a satisfying life, self, sociabilité, espace vécu, motion, insider, local knowledge

はじめに

鳥取大学地域学部の「地域学総説」（3年生の必修科目）は今年で5年目を迎えた。この授業で目指しているのは、学生たちが地域学を理論的に学んで、「地域学」を自分の言葉で明確に語れるようになることである。それには授業がそれだけの内容を備えていなければならない。このため毎年10名以上の教員が関わって念入りに準備し議論を重ねて地域学の深化に努めてきた。この「地域学総説の挑戦」シリーズ¹は授業の実践記録であるが、同時に、地域学に学術的な形を与える場にもなっている。したがって、これまで発表してきた「挑戦」の1から4を読めば、鳥取大学地域学部の地域学が学術的にどのように深化してきたのかがわかる。もちろん、本稿も同じ役割を担っている。本年度の地域学総説が何を積み重ねることができたのかを、授業内容を紹介しつつ学術的に明らかにして、現時点での地域学像を描くことである。

授業は3部構成で行われた。第1部では、なぜ地域で考えるのか、地域の存在意義は何か、地域を捉えるにはどのような視点が必要なのかを検討した。第2部は、地域の現場でのさまざまな取り組みの紹介である。ここでのねらいは、現場で起きていることから学んで地域学に具体性の豊かさを取り込むこと、さらに第1部の理論的知識をもって、具体的な実践の事例から地域学として抽象化する何かを見出すことである。なお、第1部、第2部ともに、最後に教員による短い「まとめ」(30分間)と、ディスカッションを入れて、学生が授業内容をできるだけ正確に理解して先に進めるよう工夫した。第3部は全体ディスカッションである。授業の全体像を確認すること、それまでの学生のコメントやアンケート、教室での議論からみえてきた疑問点・論点を整理して、問題を掘り下げていくこと、こうした学生と教員の協同作業を通じて一歩ずつ地域学を創っていくことを目指した。地域学総説そのものを地域学の実践の場にしようとしたのである。

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

¹ 柳原邦光「『地域学総説』の挑戦」、『地域学論集』第3巻第3号(2007)、同「『地域学総説』の挑戦2」、『地域学論集』第4巻第2号(2007)、同「『地域学総説』の挑戦3」、『地域学論集』第5巻第2号(2008)、同「『地域学総説』の挑戦4」、『地域学論集』第6巻第2号(2009)。

それでは、以下の順序で論述する。第1章では、昨年度までの地域学総説の成果を簡潔に紹介する。次に、第2章で本年度「総説」の第1部を、第3章で第2部を検討する。第4章では、授業をすべて終えた後に学生が書いた最終レポートから、学生が授業をどのように受けとめ、いかなる理解にたどり着いたのかを考える。なお、第4章については、仲野誠（地域政策学科）の分析²を基にしている。最後に、地域学の暫定的な構想を紹介して、終わりとした。

第1章 これまでの地域学総説の成果—「地域学の現在」—

これまでの成果についてはまとめたことがあるので、ほぼそのまま再録することにしよう³。要点は、地域学の目的と目標、対象とする空間の大きさとその関係性・重層性、ローカルな空間の持つ意味、地域を見る3つの視点である。

なぜ、今、「地域」なのか。近代は個人の自由と国民国家を軸に人の生活と幸せの条件を整え保障しようとしてきた。しかし、今や、なにもかも地ならしして同じ価値観をもった世界になってしまうグローバリゼーションと、様々な絆や関係を断ち切る、徹底した個人化とによって、国民国家は期待された役割を果たすことができなくなり、個人も様々な支えを失い孤立感を深めつつある。こうした現象が進むなかで期待されるようになったもののひとつが「地域」である。

地域学が目指しているのは、「地域」において「生の充実」や「わたし（たち）の幸福」の実現に寄与することである。この空間で、経済的な諸条件を含めて「人として安心して幸福に生きていくために必要な諸条件とはなにか」、「それを実現するにはどのような方法があるのか」を考えるのである。人と人との関係についていえば、人と人が支え合う関係とそのための場を発展させる条件と方法とを考えるのである。つまり、「現実の地域」と「望まれる地域」との間に隔たりがあることを認めて、これをできるだけ埋めていくことが、地域学の目標である。こうした広い意味で、地域学は「実践の学」なのである。

それでは「地域」とは何か。それは、自然環境や社会環境、人と人との結びつきを含めて、何らかのまとまりをもった、緩やかで曖昧な空間である。決してあらかじめ大きさを特定できる空間ではない。「実践の学」としての地域学では、検討すべき問題があるとき、その問題に応じて対象となる地域が決まるのである。地域は単独で存在しているわけではない。地域の内にも外にも地域がある。地域は大小さまざまな空間との関係性・重層性のなかにある。地域をどのような空間規模で考えるとしても、地域学は、国家の諸制度や経済システムなど、地域を越えるものとの関係も検討しなければならない。人の暮らしと密接に関わっているからである。したがって、地域を考えるとき、このような諸関係を常に視野に入れておかなければならない。

しかし、ひとまずローカルな空間を出発点として考えたい。というのは、ローカルな空間は人々の身体が存在する暮らしの場であり、生身の人間としての存在はここから始まると考えるからである。「地域」や「地域学」への期待が現代を生きる人々の根源的な不安に由来しており、生活に近いところで考えることが求められているだけに、この空間において日々の生活を支える諸関係、「生きている」という実感につながる様々な「つながり」を考えたいのである。「つながり」として最

² 仲野誠「地域学教育の当面の成果——2010年度『地域学総説』受講生の最終レポートから」、『地域学論集』第7巻第2号（2010）

³ 柳原邦光「地域学の現在—鳥取大学地域学部の挑戦—」『地域学論集』第7巻第1号（2010）,113-114頁。

初に想起されるのは、人と人との結びつきであるが、それだけではない。自然との関係、土地との関係、過去や過去の人々との関係など、様々な関係がある。労働や生産に関わる関係が重要であることはいうまでもない。このような諸関係を総体的に考慮して、「地域性」を捉え、それが人の生にとってもつ意味を検討することになる。

こうして、地域学は地域性を尊重しつつ、「誰もが人として生きやすい状態」を考え、その実現を目指すのである。このとき動員されるのは、アカデミックな知（学問）だけではない。地域学は、暮らしの場に生きている知恵・技術・哲学（「生活の知」）に多くを学ばなければならない。

もちろん、これは容易なことではない。地域学は、人と地域との関係、人の生や幸福にとって地域がどのような意味をもっているかを理解するための視点として、ひとまず次の3つが重要だと考えている。

ひとつは〈「わたし」からの視点〉である。この視点は地域を自明視してそこから発想することを前提にしていない。むしろ地域の存在と意味を実感できない「わたし」が様々な「つながり」を発見し、そこに「わたし」を位置づけるための作法である。「わたし」が想像力を介して生きている空間（「生きられた空間」）を知るための方法なのである。こうして得られた認識から、『「わたし（たち）の幸福』は何に支えられているのか』、『何が重要なのか』、『何が問題なのか』、『これからどうしたいのか』、『どうするのか』を考えるのである。

2つ目は、地域を対象化してその構造を客観的に捉えようとする〈構造的視点〉である。地域は自然環境と人間の営みとの相互作用から生まれたものである。人の暮らしは自然という土台の上で営まれている。それは暮らしが自然に支えられ制約されているということだが、その一方で、人は自然に働きかけて暮らしを創ってきた。暮らしはこの働きかけの結果でもある。この自然と人間の暮らしとの関係から地域の構造と特性を解明すること、さらには、もっと大きな空間における地域の位置関係を把握することなど、地域のなかにいる「わたし」からは見えない関係性を、地域から距離をとりつつ解明しようとするのが〈構造的視点〉である。さらに、〈「わたし」からの視点〉で捉えた問題を含みさまざまな問題の解決や望ましい状態の実現、そのための方法を、現実の地域をベースにして考える、政策的実践へと向かう視点でもある。

3つ目は〈移動の視点〉である。人は移動する存在である。この視点から見たとき、人と地域（性）との関係はとても複雑なものになる。地域における諸関係や「つながり」は、移動する人にとっておそらく固定的なものではない。それらは相対化される。というのは、人は唯一の関係のあり方、「つながり」の型だけでなく、複数の地域（性）を生きているからである。この場合、自ずと諸々の地域（性）との間に適度な距離が生じていると思われる。人は新たな地域（性）に入っていくことで、他者と出会い、新たな自分を発見し、変化していく。地域もまた、移動する人々との出会いによって微妙に変化していく。この視点に立ったとき、地域は「開かれていること」、『柔軟性をもつこと』を期待されている。また、移動する人々にとって、人と人との「つながり」は選択的なものになる。地域にはそれを受け容れることが求められる。

第2章 第1部 「地域を捉える視点」

第1部は、授業計画にあるように、導入として筆者の「いまなぜ地域を考えるのか」に始まって、5名が個別のテーマで報告した。第7回目では、はじめに筆者が「まとめ」をおこない、続いてディスカッションに入った。初回の筆者の報告については、先にあげた論文「地域学の現在」の第2章「な

ぜ、今、地域なのか」で詳述しているので、こちらを参照していただきたい。要点だけを述べれば、地域学への期待は、表に現れている「まちづくり」や「地域活性化」という課題以上に深いところからきているのであり、地域学は現代という時代の抱える根源的な問いに応えなければならないということである。

それでは、これから第2回から第6回までの報告の概要を紹介するが、ここでは2つの方法で地域にアプローチすることを目指した。「マクロの視点と長いタイムスパンで地域を捉える」(第2報告と第3報告)と「個人から地域を捉える」(第4回-第6回報告)である。

第1節 マクロの視点と長いタイムスパンで地域を捉える

このアプローチの特色はマクロの視点と長いタイムスパンの併用である。すなわち、空間を大きくとって客観的に日本の地域構造を把握し、そこから個々の地域をみる視点であるが、長期的に見れば地域構造は不変ではなく、変化している。2つの報告は地域構造の形成と変化を数百万年の時間、あるいは縄文時代から現代までの時間(とくに江戸期以降)において捉えようとしている。

(1) 第2回報告 光多長温「経済から地域を捉える」

光多の方法は、人口の推移と人の動きに着目し、これを中心的な指標として日本の経済的な地域構造とその変化を捉え、全体的な地域構造のなかで個々の地域の位置関係を考えようとするものである。

最初に、報告が明らかにした主な事実関係を確認しておこう。縄文期以降の人口変動から、日本の人口は、とりわけ江戸期、明治期、戦後経済成長期に著しく増加していることがわかる。いずれの時期においても人口増加は産業技術の発展と密接に関わっている。江戸期には、人の流動は小さく、地域間で人口のバランスがとれていた。物流の中心は日本海側で、人口規模も南関東や近畿より大きかった。ところが、明治以降、物流と人の流れの中心が太平洋側へ移る。この時期に社会資本の整備(港湾と鉄道)が進み、軍需工場・旧制高校・旧帝国大学の配置などが決定され、太平洋ベルト地帯が形成された。この戦前の産業構造が戦後の地域経済構造の芽となる。この変化には政治的判断が働いているが、それを左右した諸要因のひとつは、地形など自然条件であった。戦後になると、経済成長段階に応じて工場立地に適した地域が変わっていき、それとともに人の動きも推移した。サービス経済化が進んだ今日では、あらゆる面で東京一極集中が進行し、地域間格差が大きくなっている。今後は、地域間人口移動のあり方とそのファクターが変わる可能性がある。

統計データの活用と情報の地図化に基づく光多の分析を簡潔に要約するのは容易でないが、光多報告が明らかにした重要なポイントを大づかみに示せば、以下の3点になる。①人の移動と経済的な地域構造との間には密接な関連があり、経済的な地域構造が人の動きに大きく影響している。つまり、この構造にしたがって人が動いている。②何がこの構造を生み出したかといえば、経済の動きが挙げられるが、地形などの自然条件と政治的判断も重要である。③今後については、人々が何を求め、地域がそれにどう応えることができるかが問題である。

(2) 第3回報告 矢野孝雄「大地から地域を捉える」

地形・地質の専門家である矢野は、この報告では、地形・地質と人間の活動や社会が必要とするものとの関係を検討した。それは次のように要約できるだろう。地形・地質からみた構造は数百万

年という時間のなかでは変化しているが、人間の歴史においてはほぼ不変である。しかし、社会経済的地域構造をみると、変化を確認することができる。江戸期から今日までに、中核地域は日本海側から太平洋ベルト地帯へ移動し、日本海側の周辺化が進んだ。後者の地域はまた、半周辺地域と周辺地域へ分化していった。

この変化を地形・地質の観点からみると、次のことがいえる。江戸期は鎖国しており、大型船舶の開発が禁じられていた（政策的判断）こともあって、波が穏やかな瀬戸内海・日本海沿岸が北前船による物流のメインルートとなった。地形・地質的には、小規模な港があれば十分で、瀬戸内海・日本海沿岸はこの条件にかなっていた。ところが、開国して、西欧近代発の工業化に直面し、世界システムに編入されると、それに応じた鉄道網・大型船舶と大規模港湾・産業構造が必要になった（世界システムのレベルでの経済的要請と政策的判断）。中心は、地形・地質的にそれに適した太平洋側に移り、三大都市圏が生まれた。それ以外の地域が周辺にとどまるのか、半周辺化するかは、ひとつには、この三大都市圏に接続できる地形的条件の存否にかかっていた。

以上からわかるのは、次の2点である。①時代によって人間や社会の求めるもの（諸条件）が変わり、地形・地質との適合関係も変わってくる。②地形・地質は人間の生活・社会のあり方・経済的な地域構造を枠付けるが、すべてを決定するわけではない。重要なのは両者の相互関係である。

(3) 小括

2つの報告は次のように総括することができる。①地形・地質の観点と人口や経済の動きの観点から日本の地域構造を捉えて、そのなかでの個々の地域のあり方を考えようとしている。いずれも、一人ひとりの人間の判断を越える大きな枠組みを念頭において個々の地域を見ようとするマクロの視点である。②人間の生活、とりわけ経済生活はこの枠組み（地域構造）に相当程度規定されている。③この枠組みは、地形・地質をはじめとする自然条件と日本を越える広域的な、あるいは世界的な諸関係（客観的諸条件）との関係において形成されるが、それだけでなく政策的な判断などの人間の諸活動とも関係している。④地域のありようは、客観的諸条件と人間の判断・働きかけとの相互性の観点から考えるべきである。

第2節 個人から地域を捉える

ここでは、3つの報告を紹介するが、いずれも一人ひとりの人間から問題を立てている点で共通している。すなわち、吉村伸夫は、人間の認識の仕方から地域性と個人の生き方との関係を考える。仲野誠は、〈わたし〉から〈わたし〉を取り巻く構造と関係性（地域、社会、グローバルなつながり）を、児島明は、人間を移動する存在ととらえ、そこから人と地域性との関係を考えている。

(1) 第4回報告 吉村伸夫「文化から地域を捉える」

吉村は人間の認識の仕方を次のように考える。人は、帰納（経験から法則を考える）と演繹（法則から経験を説明する）と表象（感覚や知覚を通して思い描かれた絵像）によって自らを取り巻く「世界」（「宇宙」）を認識する。そして、帰納と演繹を永遠に繰り返して、仮説的な法則を現実に適用し検証し修正（「批評の循環」）しながら「世界」認識を確実なものにしていく（学問とは、このプロセスを通して仮説的法則を徹底的に精緻化し、認識の精度を高めたものである）。人はまた何

らかの地域性（地域文化）のなかに生れ落ち、それを身体化していく存在でもある。身体化された地域性それ自体は、他の地域性と同等で、その尊重なしには人間の尊厳も生の充実もありえないという立場を吉村はとる。

それでは、人間の「世界」認識と身体化された地域性との間にはどのような関係があるのだろうか。吉村によれば、同じ地域性を身体化している人々の間には、「世界」認識において何か共有するところがある。人は事実として存在する世界を「批評の循環」を通してできるだけ正確に理解しようとするが、意識化できず対象化もできないために、「批評の循環」の対象にならないか、なりにくいものがある。それが地域性である。したがって、人間は人間のすべてを制御できるわけではない。

そうだとすれば、人が地域で生きるとはどういうことなのだろうか。地域性はそれを身体化した人間にとって自明なものであるから、自ら批評し検証することは難しいが、地域性のすべてが好ましいわけではない。この場合、地域性を丸ごと否定することはできない。むしろ、「批評の循環」を通してえたもの、あるいは、自分はこうありたいという願望にしたがって、地域（性）に何かを付け加えていく。すなわち、自分にとって「快適な意味空間に加工して」、生の充実を実現することができる。しかしながら、この地域性と地域の尊厳は、しっかり目を見開いて世界を見ていかないと、国家に対しても、グローバリゼーションに対しても、守ることができない。

(2) 第5回報告 仲野誠「〈わたし〉から地域を捉える」

仲野にとって重要なのは、〈わたし〉にとっての「生きられた空間」であり、この空間で「生きている」という実感のある状態を実現すること、「拠り所」であるはずの地域を取り戻すこと、である。そのためには、社会的世界において〈わたし〉がどういう「位置」にあるのかを知ることが重要である。〈わたし〉の生と地域や社会との関係を考えること、そこに〈わたし〉を位置づけること、〈わたし〉の〈いま、ここ〉を相対化する力を身につけること（「往復する思考」）である。それは〈わたし〉の幸福だけでなく、〈わたしたち〉の幸福を考えることでもある。つまり、〈わたし〉の生の営みを常に問い直し、「〈わたし〉の幸福」と「〈わたしたち〉の幸福」、〈わたし〉がそのなかにある構造や関係性を問いながら、「これからどうすればいいのか」を考えて、小さな実践を積み重ねていくことが重要なのである。

所与の条件や状況（構造・関係性）に規定されつつも、〈わたし〉がそれを自覚し、それとの間に適度な距離を保って生きること、決して〈わたし〉がすべてではなく、状況と〈わたし〉との相互関係、相互作用という捉え方を仲野は重視している。仲野の〈わたし〉からの視点は、決して〈わたし〉にとどまるものではない。〈わたし〉から出発して政策的実践に向かう、広い視野と長い射程をもった視点なのである。

(3) 第6回報告 児島明「移動から地域を捉える」

児島によれば、人にとって自分の身体のある場所が「ローカルな領域」である。人は移動する存在であるから、生まれ落ちた地域（性）を離れて、別の地域（性）に入っていく。移り住んだところが、その人にとっての新たな「ローカルな領域」となる。こうして、移動することで、人は身体に複数の地域性を重層的に織り込んでいく。人が「生きている」という実感をもつためには、この織り込みプロセスがうまくいかなければならない。そうでない場合、疎外感・空虚感（「何をしても意味がないという感じ」）が付きまとうことになる。

地域は「他者」と出会う場でもある。地域での「他者」との日常的で具体的な応答を通して、「他

者」を識る。それと同時に自分の中の「他者」を含めて「自ら」を識ることができる。それは自分自身で具体的に判断して生きてゆくためのまなごしを培うことでもある。この意味で、移動はいわば「旅」であり、その先々で出会う地域は「他者」との接触を通して何かを「発見」する場なのである。

児島のように考えると、地域は複数の地域性をもつ人々によって構成されており、移動する人々との交わりを通して人も地域自体も微妙に変化し続けていることになる。

(4) 小括

以上の3つの報告からいくつかのことが確認できるだろう。まずいえることは、誰もが「生きている」という実感をもちたい、また、人として尊厳をもって生きたいということである。それには地域という場が重要であり、地域性が尊重されねばならない。しかしながら、人と地域との関係はかなり微妙である。誰もが地域（性）のなかにどっぷり浸かって生きるわけではない。地域（性）との間に適度な距離をとることも必要であり、それが可能でなければならない。

また、次のようにいうこともできるだろう。人の主体性の問題である。人は完全な主体性をもって生きることはできないが、それでも主体的であろうとするのである。これが地域との微妙な距離感に関係している。

さらに、誰もが「生きている」という実感をもつためには、地域性をよく理解しなければならない。それには地域だけでなく、それを越えたところ（構造、関係性、国家、グローバリゼーション、人やものの動きなど）にもしっかりと目を向けねばならない。そのうえで、大きな工夫、小さな工夫を重ねて、地域を「生きやすい」方向に向けていくこと（知的で能動的な生き方）が求められている。

第3節 まとめ

第1部はどのように総括できるだろうか。タイトルは「地域を捉える視点」であるが、諸報告から伝わってくるのは、「捉える」以前の「地域という枠組みで考えざるをえない」理由である。すでに述べたように、地域学の目的は、「地域」という空間で「生の充実」、「わたし（たち）の幸福」の実現に寄与することであるが、なぜ「地域」という緩やかであいまいな空間で考えるのかという問題は、明確な解答を得ることが難しい、それだけに絶えず問い続けなければならない問題である。

この観点から見たとき、第1部の成果を次のようにまとめることができるだろう。人は構造や関係性、様々なつながりのなかにあって、それらに支えられるとともに制約されて生きている。地域もそのひとつである。したがって、完全な主体性をもって、すべてを制御して生きることはできない。しかし、それでも人は主体的に生きようとする。この意味で、人と地域との関係はきわめて複雑・微妙なのである。このような側面をしっかりと捉えて「誰もが生きやすい状態」を実現するには、〈わたし〉の切実さから出発して〈わたし〉を取り巻く諸関係に向かうことが、ひとつの作法として有効であろう。

もちろん、この視点だけでは十分ではない。先述したように地域を対象化して客観的に捉えようとする〈構造的視点〉が必要である。今回は、この〈構造的視点〉をマクロのレベルに適用して、地形・地質という自然環境と経済や政治を含む人間の判断や働きかけとの関係を捉えようとしたのであるが、筆者にとってさらに興味深いのは、日本の社会経済的地域構造を長期的な時間において捉えようとしたことである。この視点は、これまでのわれわれの地域学において、前提とされなが

らもうまく組み込めていなかったものである。〈わたし〉の「いま、ここ」にとっても、〈構造的視点〉で捉えられる地域にとっても、この歴史的視点はきわめて重要である。さらにいえば、単なる歴史的把握ではなくて、たとえば、フェルナン・ブローデルのいう多様な社会的時間の概念（長期的持続、中期的持続、事件=短期的持続）⁴を用いれば、地域の「現在」をより深層から捉え直すことが可能になるだろう。

第3章 第2部「地域から発するさまざまな取り組み」

第2部は地域の現場で立ち上がってきた様々な動きから学ぶことを目的としている。そのために、地域に深く関わってきた地域学部の教員2名のほかに、外部講師4名を招いてお話をうかがった。この章では、各報告の概要紹介というよりも、「地域学として何を学ぶことができるか」という観点から整理・検討をおこなう。なお、家中茂報告は第2部全体を見る枠組みを提示し、地域学に新たな視点（「身近な生活から生まれる知のあり方と地域学」）を加えているので、この報告については特に細かに検討したい。

第1節 第8回 家中茂報告「地域から生まれる学問—民間学・民際学・地元学—」

家中の報告には3つの論点がある。①アカデミズムの特徴と問題点、②当事者として、暮らしの全体性の中で考えること、③現場からの学問の捉えなおしと学問の変容、である。以下、順次説明する。

最初にアカデミズムについて。日本では、アカデミズムは明治期に国民国家のための、官僚養成のための学問（官学）として導入された。その最重要部分を成す社会科学の源泉は理性を唯一のよりどころとする啓蒙思想である。この思想は社会現象を自然科学の精神において扱うものだった。社会で生起する諸現象を、生身の人間である自分を殺して、つまり自分自身の生き方や問題とは切り離して考えることを前提としていた（当事者性の排除、人の生活や生き方から切断された学問のあり方）。官学も同様で、自分自身ではなく国家の発展がその第一義的な目的だった。この結果、学問を学ぶことで、人は真理や優れたものは自分の生活から離れた、別のところにある、そういう感覚を身につけるようになり、生活から自分の目を切り離して問いを立て、考えるようになってしまった。このような自分自身の問いから切り離された学問のあり方は、人々の切実な問いに応えるものではなく、一人ひとりの人間が生きていくときの倫理や判断の基準にはならない。アカデミズムには、この意味での実践性が欠けている。

家中が重視するのは、当事者として暮らしの全体性の中で考えることである。人々の暮らしもまた知的な営みである。暮らしは科学とは異なり、常に無限定な全体性のなかにある。人はこのなかで日々生起するさまざまな問題に直面しながらもっとも適切な解決方法を探し求めている。暮らしの現場においては、人は常に当事者である。すなわち、行為の対象と行為する主体の双方にまたがる存在である。当事者として、個別の具体的な関係から考えなければならない。地域で暮らすとい

⁴ 井上幸治編集=監訳『フェルナン・ブローデル[1902-1985]』（1989年、新評論）に収められたフェルナン・ブローデル「長期的持続—歴史と社会科学—」と湯浅尠男「私のブローデル」を参照。

うことは、当事者として生活から考えるということなのである。

家中はこの点に関して次の結城登美雄の見解を引用している。確かに専門的な知識（学問的な知識）ではないかもしれない。しかし、長年その土地に生きていれば、それなりに深い思いと考えをもっている。地域の資源とそれを活かす知恵と技術と哲学（生活の知）をもっている。これを明確にして、この力を合流させて、自分たちで自分たちの生きやすい場所に整えなおすことが重要だ（地元学）。

また、鶴見俊輔の「目安を立てる」という考え方を組み込んでいる。要するにこういうことである。生きていくとき重要なのは、自分のおかれた状況を理解し、そこから問題をつかまえようとすることだ。日々の具体的な複雑な状況の中で確かな判断ができるようになることだ。それには、判断するための目安（基準）をもつことが必要だ。その目安となるのは、まずは自分の身体や身近な生活とそこから得られた、ものの見方である（民間学）。

これまでの家中の見解を地域学の観点からまとめてみると、次のようになるだろう。人は生活と切り離されることのない、生身の人間である。まずこの事実を認めることから出発しよう。第一に重要なのは、実際に生活していくこと、そして内面を大事にして生きることである。生活するなかで一人ひとりが日々体験するリアルさ、そこでの切実さを直視して、生活の必要とそこでの切実さに応える学問が必要だ。それが地域学である。地域学は実践の学であるが、実践性の核はこのような一人ひとりの「内面性の真実」にある。自分自身の生き方を脇において実践はありえない。

こうした見方は学問の捉えなおしを迫る。真の専門家とは、現場の声を真摯に取り上げ、科学的な体系として実証し、構成していける者だ。学問における実践とは何か。考えるという回路の中には、自分が既にもっている捉え方がある。まずはそれをできるだけ抑えて（「心を無にして」）、それまで自分の中になかった他者（現場での切実な問い）を受け容れ理解することを試みる。そして、これを自分のなかにすでにあるものと比較し、格闘させ、検討する。こうしたプロセスをへて、それまでとは異なる新たな捉え方を獲得していくこと、これもまた学としての実践である（鳥越皓之）。知識生産のあり方も、生活・社会のなかで活かされる知識を生産すべきであり、使用する人間を想定して知識を生産し、それを伝える表現方法の確立を目指すべきである。これにより科学的な発想方法自体も変化するはずである。家中が着目するのは、自然や身体に関わる具体的な生活のなかから生み出された知のもつ力、自然のなかで体感・実感とともに獲得される知識とその力である。これこそが人々を結びつけ変えていく力、世論を動かすパワーとなるのである。アカデミズムにかけているのがこの力である。

以上を地域学の観点から整理すると、近代の学問は、観察主体（人、研究者）がものごとを客観視できる中立的な存在だという前提（ゆるぎない観察主体が観察対象を客観的に捉えることができるという立場）に立っている。しかし、地域を考えると、主体自身が地域のなかにあって、主体性と客観性を確保できない。実際には、人は誰でも生身の人間として、当事者として地域性をもっている。この地域性に対して客観的ではありえない。したがって、地域と関わることで、学問自体もそのあり方を変えていかざるをえない、ということであろう。

筆者は家中の見解にはとても重要な問題が含まれているのではないかと考えている。「生活の知」というとき、注目すべきは「人と自然との関係」であろう。生活の世界において、人は自然を人間から切り離された、別個の存在とみなしてきたわけではない。むしろ、日々の労働と生活を通して自然との間に感情・感覚・感性をともなった具体的な関係を結んでいる。ここでいう自然とは、人の身体的な感覚を通して結ばれた関係なのである。近代的な主体と客体という関係ではない。生活の知は、このような形で、長期的な時間のなかで形成され存続してきたのであろう。ここにはアカ

デミズムの知とはまったく異なる認識の仕方, 知の組み立て方があるのではないか。簡単にいえば, ものが違ってみえるのではないだろうか⁵。われわれの身体にもこのような知が刻み込まれているといえないだろうか。地域学はこの問題にもっと取り組むべきであろう。

第2節 地域のなかで活かされる知識とアート

ここでは, 最初に地域環境学ネットワークのメンバーである丹羽健司氏と佐藤哲氏の報告を検討する⁶。家中は, この運動のメンバーとして実際に関わってみて, 自然のなかで体感しつつ獲得される知識のもつ力に驚いたという。人と人とを結びつけ変えていく力になるからである。さらには世論を動かす力にもなるからである。2つの報告は前述の家中の論点の3番目に関わるが, アカデミックな知・専門的な知識と生活から生まれる知との接近・出合いという問題でもある。

はじめに第9回丹羽健司氏「森の健康診断, 森の聞き書き, 木の駅事業」を取り上げよう。丹羽氏は元農林水産省職員(農政局)で, 現職のときから, 市民・行政・研究者が協働して人工林・放置林の現状を科学的に調べて報告書を作成する活動(「矢作川森の健康診断」)を主催してきた。この活動自体が素晴らしいことなのだが, 意外なことに, 活動は報告書を作成し報告会を開催して終わる。現状を詳細に調べ上げ目にみえる形にすることで活動は終了するのである。なぜだろうか。矢作川森の健康診断実行委員会のホームページには, この疑問に答えた次の一文がある。

なぜなら, 私たちは森の健康診断に参加した人たちのキヅキとマナビを信じているから。私たちと一緒に森で過ごした参加者達は, 人工林の現状や山里暮らしの知恵や森の豊かさを確実に感じ取り学んで帰っている。その彼らが家庭や職場や学校で流域の森のことを伝えてキヅキとマナビの連鎖を拡げてくれている。その一人ひとりが「流域の森を何とかしなけりゃ」「持続可能な林業のプロをたくさん育てなきゃ」などと, 一人ひとりが自分の意志で自由に確信を持った発言をしていくのだろう。あるいは森林ボランティアを始めたり, 行政サイドで頑張ってみたり, いろんな関わり方が始まっているのだろう。たった一つの答えや処方箋を私たちは強要

⁵ これについては家中茂「序章 実践としての学問, 生き方としての学問—解題と論点の整理」, 新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立 シマの力(下)』(コモンズ, 2006年)を参照。注目すべきは第2節「他者と関わり, 現場から学ぶ—白保サンゴ礁埋立反対運動を事例に」である。ここでは, 土地や海の帰属をめぐる近代の私的所有権概念と住民の「所有」観(日々の労働等の働きかけを通して生まれる帰属関係とその認知)との違い, そこから生じる問題性が見事に照らし出されている。人の生活とその持続という観点から見たとき, この違いがどれほど大きな意味をもっているか, そこからいかに深刻な問題が生まれているか, がわかる。また, 生活を守ろうとする住民のエネルギーの大きさと深い知恵, 状況に学んで新たな知を身につけていく様子も知ることができる。住民の「所有」観については, 「共同占有」論が参考になる。鳥越皓之『環境社会学 生活者の立場から考える』(東京大学出版会, 2004年), 85-88頁を参照。二つの知がどのように違うのか, それが出合ったときにどんなことが生じるかについては, 歴史研究であるが, カルロ・ギンズブルクの『夜の合戦』(みすず書房, 1986年)が参考になる。カトリックの異端審問官の文化とヴェナンダンティ(農耕信仰を生きる農民)の文化との出合いと変容である。

⁶ 第2節の記述内容は, 家中茂が第14回の冒頭で行った「第2部のまとめ」に多くを依拠している。

しない。(下線部, 筆者)

もはや説明に多言を要しないだろう。家中がいうように、森の中に入って協働と実感とともに得られた学びと知のもつ力(科学と五感の気づきと学びの連鎖)を確信しているのである。それにしても、丹羽氏はなぜこのような活動を始めたのだろうか。

緑あふれる日本の人工林で間伐手遅れの放置林という不毛の森が広がり、大雨のたびに土砂崩壊を繰り返している。日本では1年間に成長する木材量と世界中から買い漁る木材量がほぼ同じなのに自給率はたった20%あまりという矛盾。森林簿という戸籍はあっても、現況がわかる国政調査がない日本の人工林、放置林がどれだけあるか、行政も知らず、調べようもしない。地図も数値根拠もないのに間伐促進事業に声を枯らす行政、海図のない航海に等しい終わりのなき森林保全論議、あまりにあほらしいので、私たちは勝手に調べることにした。(丹羽健司, 2010, 『グリーン・パワー：特集 森の健康診断』)。

丹羽氏はまた、日本では、本来有している森林や農地などの資源を有効利用した自足的システムを維持できなくなったために、今や食も人も森も、ムラさえも棄てられようとしているとも述べている。このような大きな認識が丹羽氏をして「森の健康診断」などの活動に向かわせたのであろうが、農政局の専門職員としてさまざまな情報に触れるとともに、実際に現場に入って森の現状を知ったことも大きいのではないか。国レベルの大状況と森林の現実との両面が視野に入っているからこそ生まれた活動ではないか、と思われる。

もうひとつ興味深いのは、間伐に関わる「木の駅事業」を説明する際、「稼ぎ」と「仕事」、「冷たいお金」と「温かいお金」、「怯え」と「連帯」という対比で語ったことである。「稼ぎ」とは個人や家の生活に必要な金銭をえるための活動であり、「仕事」はムラの生活を維持していくための作業である。「冷たいお金」はどこでも通用する通貨であるが、「温かいお金」とは、地域通貨のように有効範囲が限られていて、使用することでその範囲内で労働とお金が循環し地域の生活を支える一助になるものをいう。利益と利便性の追求だけでなく、住民の生活を支えるからこそ「温かい」のである。「稼ぎ」と「冷たいお金」には「怯え」がつきまとうかもしれないが、「仕事」と「温かいお金」は「連帯」を生む。丹羽氏の活動はもちろん後者を重視しているのだが、このような発想をどこで学んだのだろうか。森林に入り、ムラで人々と接触することを通してえた「山里暮らしの知恵」の発展型ではないだろうか。「森の健康診断」・「山里の聞き書き」・「木の駅事業」は行政職員や研究者の専門的知識とムラのなかにある知とが出合う場になっているように筆者には思われる。これもまた参加者に確かな手応えをもたらす秘密の一つではないだろうか。

第10回佐藤哲氏(長野大学環境ツーリズム学部, 生態学者)「地域環境学ネットワークとは」は、科学の成果が社会において十分に活用されていないという反省から、科学研究のあり方を問い直し、地域住民との協働を目指した試みの紹介である。なぜ活用されないのか(なぜ結果的に役に立たないのか)、科学研究のあり方自体に問題はないのか、そもそも環境を保全し自然資源を管理するといふとき、その主体は誰なのか、地域にとって解決すべき固有の問題は何なのかなど、問いはそれまでにならないものとなる。

そこで明らかになった、これまでの科学研究の抱える問題点は、次の3点である。①科学者は普遍性を追求するが、そうした研究スタイルは、地域に固有の状況で生じる問題の解決に適していない

い。②科学的知識生産が在来の意思決定システムや価値観、知識体系と乖離している。③地域の固有性を踏まえた問題解決型の研究成果が科学者コミュニティの中で評価されない、である。保全管理の主体については、現場に暮らす人々の重要性が十分に認識されていなかった。環境は生活と密着しており、この関わりから地域に固有の伝統や文化、問題の解決方法が生まれている。また、住民は環境（生態系サービス）の直接の受益者であるが、ときに加害者にもなる。環境と利害関係を持ち、その未来に関わる人々（ステークホルダー）は実に多様であり、「みんなが主役」なのである。科学者の判断だけですむ問題ではない。

以上の指摘をどう考えればいいのか。具体的な事例を挙げて説明されたわけではないので、筆者には、本当のところ、とくに①と②がよくわからないのであるが、普遍的であろうとする科学の成果が社会的な場で活かされるには、地域に固有の問題の現れ方を知り、問題を受けとめ解決する地域の仕方（文化）に適した形で科学的知識を生産しなければならないということであろうか。この点に関して興味深いのは、「定住する研究者」である。対象地域を時折訪ねて調査するのではなくて、そこに定住して継続的に研究する研究者である。この場合、研究者であると同時に、ステークホルダーの一員であり、生活者であり、地域の未来に関わる当事者でもある（「多重的存在」としての研究者）。継続的研究であるから、データの取り方も質も異なるに違いないが、研究者が住民の一人になったとき、そのまなざしに問題はどのようにみえてくるのであろうか。科学研究はどのような変貌を遂げるのであろうか。地域にどのような「役に立つ知識」を提供できるのだろうか。今後の研究成果が待たれる。

科学の知が地域の知にとって異質で外部性をもつとすれば、アートも同様かもしれない。第11回の野田邦弘（地域文化学科）「アートが地域を再生する－地域政策のニューウェーブ‘創造都市’」は、アートが地域にとってもつ意味を論じている。

野田は、本題に入る前に、なぜアートなのかを非常に大きな文脈で説明している。まず、報告の冒頭で地域が注目される時代背景を論じて、現在、世界的にナショナル・ガバナンスよりも国際ガバナンスとローカル・ガバナンスの比重が高まっており、国家を超える地域とローカルな地域の重要性が増しているとして、次の諸点を主張する。日本の国土計画の歴史にも批判的に言及した上で、今日では地域の特性に適した地域固有の政策を実施すべきであること、日本が知識社会に入ったことを踏まえて、地域ごとの成長戦略を地域自らが描く必要があること、戦略の一つとして創造的な仕事をする人を増やすべきこと、である。続いて、野田は専門である創造都市論の歴史とエッセンスを簡潔に説明しながら、知的なものやアートなど、創造性を活かした生活と経済の仕組みを創出しようとする世界の様々な動きを紹介し検討した。

アートはなぜそれほど重要なのだろうか。野田によれば、ひとつには知的なものやアートも経済効果をもたらすことができるからである。さらに、人々の交流を促し、住民の意欲と誇りを生み、地域に活力をもたらすことができるからである。野田は瀬戸内海の直島をはじめとして国内外の多数の事例を紹介しつつ、この点を説明したのだが、筆者の脳裏に真っ先に浮かんできたのは、地域住民にとってアートはどういう意味をもっているのか、住民は違和感や抵抗感をもったのではないか、という素朴な疑問である。実際、はじめはそうだったようである。しかし、アートが地域の外から人々を引き寄せるにつれて住民の関心が高まり、積極的に関わるようになり、それがまた地域の雰囲気や生活を良くして、見にくる人が増えるという好循環を生んでいるという。つまり、ここで強調されているのは、アートのもつ芸術としての価値そのものというよりも、アートがもたらす社会的効果なのである。

この問題に関連して、越後妻理の「大地の芸術祭」に関するインタビュー⁷から北川フラム氏の見解を紹介しておこう。北川氏は越後妻理でのアートを介した農山村と都市との交流と相互作用について次のように述べている。農山村も都市もともに何か足りない状態にある。農山村の場合、このまま人口が減り続けると地域が壊れてしまうので、よそ者でもいいから人に集まってほしい、活気がほしいと思っている（それで越後妻理では祭りを開いてみようということで「大地の芸術祭」となった）。他方、都市の場合、人々にとって都市は人間性を抑圧しているように感じられる、生きにくい場所となっている。里山のような癒される環境とみながひとつになれる祭りの場所が必要である（だから芸術祭に魅力を感じ熱意をもって関わろうとする）。つまり、癒されたり（都市）、楽しみや活気が生まれたり（農山村）、さまざまな学びがあったりと、両者の出会いと交流はどちらにとってもプラスになる。

越後妻理の芸術祭をみてみると、アートとアーティストにとってもプラスになる。地域では多様な要素が絡んでしか（つまり、協働しないと）、ものが成立しないので、アーティストもこのような関係性のなかに入っていかざるをえない。そうすることで作品に何かしら面白さが加わっていく。また、長い時間をかけて人の労働と生活が刻み込まれた地域の景観の中にアートとアーティスト、観る者が置かれたとき、都市では経験できない何かを五感を通して感じとることができる。

それだけではない。地域自体にも変化が生じる。祭りのために様々な地域や世代や職業の人間たちが協働することで、「開いていく公共性」が立ち上がってくる。地域はそこで暮らしている人たちだけで成り立ち、ものを決めたりするだけでなく、もっと多様な人の関わりができていく器になるのではないかと、アートがさまざまな地域に入り、そこで開いていく公共性が全体のなかに立ち上がっていくのではないかと、という。

北川氏は、人間の長い営みが刻み込まれた自然のなかで展開される、アーティストと彼らを支える人々、地元の人々との協働、アートと観る者と迎える者との交流を通して、地域でこれまでになく関係性が生まれるというのである。これは非常に興味深い見方である。このような意味の公共性は、丹羽氏の「森の健康診断、森の聞き書き、木の駅事業」にも佐藤氏の「地域環境学ネットワーク」の試みにもいえることではないだろうか。

第3節 地域とともに生きる

この節では、第12回成相脩「山陰の風土と宝」と第13回森まゆみ「小さな雑誌でまちづくり－谷根千の冒険」を紹介する。二人はともに地域にあるものを掘り起こし活かしていく活動をされてきた人である。家中の論点でいえば、②に関係している。

成相脩氏は鳥根県松江市在住で、季刊誌『さんいんキラリ』のプロデューサー、NPO日本古民家研究会理事長を務めるなど、その活動は多岐にわたっているが、活動を支えているのは「もったいない」と「いのちをつなぐ」精神である。それは古くからあるよきもの、文化的なものを掘り起こし、目にみえる形にして、生活のなかに活かしていこうとする精神である。この精神は持続性を重んじる。したがって、成相氏の仕事はボランティアではない。採算がとれるよう計算されている。

⁷ 北川フラム（森 繁哉）「インタビュー 地域を開くアートの祭り—越後妻有の〈大地の芸術祭〉から」、『季刊 東北学』第6号、2006年。

たとえば、『さんいんキラリ』は、人であれ物であれ、料理であれ、生活のなかにあるよきもの、文化的なものを鳥根・鳥取両県や東京・大阪などの都市に美しい形で紹介し、生活の充実と人の動きをつくりだしているが、ターゲットをそういうことに最も敏感な40歳以上の女性に絞っている。

もうひとつの大きな仕事はNPO日本古民家研究会を通して行われている。この研究会は古民家を自ら定義し、A～Dの4段階に評価して、認定書まで発行している。成相氏の拠点である鳥根県内にはAランク3万棟、Bランクが15万棟もあるという。ところが、現実には古民家の多くは大きなゴミとして焼却処分され、二酸化炭素を排出して環境を破壊する運命にある。これを「もったいない」と「いのちをつなぐ」精神で、地域の環境と景観の保全、建設業の新分野と雇用の創出につなげようとしている。この試みは松江市の古民家や空き家の再生利用に結実し、美しい町並みを作り出すことに貢献している。

なかでも注目されたのが、鳥根県大田市の古民家(元庄屋の「客殿」)をフランス(ヴィトラ美術館)に移築したプロジェクトである。これについては研究会のホームページで詳しく紹介されているのでぜひご覧いただきたいが、感動的なシーンが多く見られる。たとえば、鳥根の山中に建てられた古民家が遠いフランスに行くというので、解体前夜、地元の人々がお別れ会を企画し、婦人会が炊き出しをし、神楽が舞われたという。美しい情景である。解体作業はワークショップとして全国から集まった80名のボランティアの手で4日間かけて行われた。この作業は若手職人へ技術を継承する場でもあって、解体の手を休めてみんなでかつての職人たちの技を学んだという。フランスでは日本の4名の職人と現地のボランティアによってわずか1ヶ月間で組み立てた。かなりハードなスケジュールであるが、日本語しか話せない職人たちとまったくの素人のボランティアが毎日ワインを飲んで話し合っただけで完成にこぎつけたそうである。印象深いのは、組み立てが完了したとき、ドイツ人のボランティアの1人が愛しそうに縁側に抱きついている写真である。こういう交流の仕方もあるのだと筆者は感動した。元庄屋の「客殿」は美術館として活用されるが、このような人々の思いが刻み込まれて、新たな生命を生きるのだろう。

成相氏の試みは、生活のなかで長い時間を生きてきたものを掘り起こして、新たな状況に適応させ、心地よい場を作り出している。また、技術を伝承するとともに、人と人、異なるものが出合っただけで育っていく場ともなっている。そこでは意外なこともおきる。古民家のフランスの移転先では、毎年世界からアーティストや若者を集めてワークショップを開いてきたが、来年は、松江市で開催することが決まったという。古民家をめぐると人の交流は思いもかけない展開を見せているのである。

森まゆみ氏(谷根千工房、作家)は地域雑誌『谷根千』を発行してきた人である。少数の母親たちが集まって自分の町(東京の谷中・根津・千駄木)の生活や歴史(文化遺産や生活文化)を聞き取りなどによって調べて記録し、住民に伝えるためである。歴史といっても、遠く離れたところで展開される歴史ではなくて、住民の日常の体験や記憶、暮らしが刻まれた土地や建物、路地の様子や由来である。いわば暮らしの歴史である。言葉を換えれば、町の現在を豊かな過去の記憶とともに表現したのである。

詳細は森まゆみ『谷根千の冒険』(ちくま文庫、2002年)に任せるとして、筆者はお話をうかがっていて、不思議な気がした。おだやかな、優しい語り口である。難しい理論や概念も、よくわからないカタカナ英語もまったく出てこない。話の中身も、家族や子ども、暮らしなど、身近なことだ。しかし、どこか力強く、胸に響くのである。

話の中心は、森氏が関わってきた古い建物の保存運動と聞き取り調査による過去の掘り起こしに

ついてだった。なぜ古い建物を保存しようとしたのだろうか。建物に限らないが、過去を伝えるものは、自分自身が歴史のなかにある存在だと感じさせてくれるからだという。歴史のなかで生きていくということがはっきりわかる場が重要だと考えているのである。

聞き取り調査については、公式には語られることのない生活の歴史を掘り起こそうとしている。聞き取りを通して一人ひとりの生を目にみえる形にすることで、地域に生きる人の生が分厚く豊かなものとなっていくからである。また、この作業を通して、生活の場である地域を自分のものとすることができるし、そこからナショナルな歴史との接続が生じることもあるようだ。

最も興味深かったのは、地域における「のりしろ」の重要性である。「のりしろ」とは、今を生きている人と人、今の人と昔の人、人と過去とをつなぐ場のことである。たとえば、お寺の縁日、祭、井戸端、お店などがそうである。個人的に生活を維持していくことが難しくなっても、この「のりしろ」のおかげで社会的に滑り落ちなくてすむのだという。これはフランス史で「社会的結合」(sociabilité)といわれるものに近いが、「のりしろ」は分析のための視点ではなく、生活者からの視点である。「のりしろ」の役割は、地域を考えると、重視すべきポイントであろう。

他にも重要な指摘があった。地域には動かないものがある、そこから町の秩序が見えてくるという。たとえば、地形・坂・橋・神社・寺などである。また、東京は雑多な人間がいるので意見がまとまりにくい。スタンスも違うので、緩やかな連帯が必要だという。これらは生活者として人の暮らしから考えたとき、自ずと見えてきたものであろうが、地域学にとって重要な指摘である。

第4節 第2部のまとめ

筆者は、身近な生活から生まれるさまざまな問いと知を地域学のなかに組み込むべきだと考えている。家中の見解はこのことを理論的に整理して語ったものである。第2部の他の5報告はみなこの点に関わりをもち、それぞれのテーマで具体的に語っている。アカデミックな知、専門的な知識、アートのような「外部性」をもつものは、生活の現場から考えるときじっくりこないかもしれないが、これらが地域という生活の現場を尊重して関わりをもつことで、これまででない、確かな何かが生まれてくるのではないか。丹羽・佐藤・野田報告はそう感じさせてくれる。

他方で、生活の現場から立ち上がってくる知や動きには、人を支え衝き動かす、確かな力がある。このことは成相氏や森氏の報告が示す通りである。同じことはこれまで地域学総説にお招きした方々のお話からもいえる。彼らの報告の力強さ、聴く者の心を動かす波動は、長い間の努力と格闘に裏付けられた具体的な経験談であることからきているに違いないが、それだけではないだろう。彼らは生活から遊離したところで問いを立てて考え実践してきたわけではない。自分自身の問いから切り離された営みではないのである。

もちろん、これら2つの知の間には矛盾や衝突がある。生活の現場にも多様な欲求・願望がある。地域学はまだ両者の接近と出合いの問題に十分には取り組めていないが、このような現象はあちこちでみることができるのではないか。われわれはここに希望の芽を見出すことができるのではないだろうか。

第4章 学生たちは講義をどう受けとめたのか

地域学総説は今年で5年目を終えた。毎年、授業日程をすべて終了したとき、ほっとするととも

に、これでよかったのか、学生たちに意味のある何かを提示できただろうか、と不安になった。それでも5年間を振り返って、反省や後悔の気持ちといくばくかの手応えとを比べてみれば、次第に後者の方が大きくなってきたと感じている。総説は間違いなく充実してきた。教員はみな毎年全力投球するのだが、とりわけ今年は迫力があつた。教室は知的な緊張感に満ちていた。

仲野誠は授業終了後、学生の最終レポートを分析してひとつの論考にまとめている。かなり長い論考である。当初の予定では、本稿を共同執筆して、第4章は仲野が執筆するはずだった。しかし、原稿があまりにも長すぎた。というのは、学生たちのレポートから文章の一部をかなりの数引用することにしたからである。自分の解釈を書くよりも、学生たちの文章自体に語らせたいという仲野の提案で、それぞれ独立した論文として執筆することになった。是非とも、2つの論文をあわせて読んでいただきたい。

筆者は仲野の論考を読み進むにつれて感動し興奮を覚えた。200名あまりの学生のレポートを丁寧に分類し、読む者に学生の捉え方が自ずと伝わるように工夫した仲野の努力と知的誠実さに感服した。さらに、引用された文章から伝わってくる学生たちの真剣さ、言葉の見事さ、思索の深さ、知的センスのよさに圧倒されてしまった。仲野のいう意味がよく理解できた。この豊かさは、まとまったひとつの解釈として提示することをゆるさないのではないか。筆者は授業の第1回目を担当したので、そのときに学生たちに「授業が終わったとき、自分の言葉で地域学を語るようになるだろう」と呼びかけ、「総説を真剣に聴講すれば必ずできるようになる」と約束した。確かに自信はあつた。実施責任者の家中茂は学生たちの理解が正確で深いものになるよう随所に工夫を凝らしていた。しかし、最終レポートはわたしたちの予想をはるかに超えていた。学生たちのポテンシャルはとてつもなく大きい。

それでは学生たちはどのような理解に達したのだろうか。詳しくは仲野の論考をご覧いただくとして、ここでは筆者が気づいたことをいくつか述べてみたい。なお、レポートの課題は次の通りである。「第1部、第2部の講義をふまえて、①自分の受けとめた『地域学』について説明しなさい(説明する相手として、たとえば家族や友人、就職活動の面接官などを想定するとよい)。②そして、それを自分のものとして深めていくにはどうしたらよいか論じなさい。」

学生たちはみな、入学時以来悩みを抱えていた。これから学ぶことになる、あるいは学んでいる地域学がどういうものなのか、他の人にうまく説明できないのである。語ってもとってつけたような言葉にしかならず、自ら納得できるものではなかった。地域学は遠くにあつて、つかみどころのないものだった。地域学総説が始まったときも同じ状態だったようである。この状態を脱け出すことが、授業の目的のひとつになった。実際、レポートの多くはこの苦しさを率直に吐露している。ところが、驚くべきことに、「地域学のわかりにくさ」は「近さ」に転換されていく。仲野は次のように語っている(これからいくつか引用するが、それはすべて仲野の論考からのものである)。

多くの学生は地域学と自分自身が密接につながっており、自分自身を棚上げして学べるようなものではないと実感し始めている。地域学に向き合っているように見えて、実はこれまでの自分自身に向き合っているともいえる。ここには、地域学を学ぶことが、実は自分自身の生き方に向き合っているのだということへの気づきの萌芽がある。

この感覚は、自分が何も知らないという自覚と関わりがありそうである。

これらの記述は、「私が知っていること」を前提に語るのではなく、「私は何を知らないで今まで生きてきたのか／何を知ったつもりになっていたのか」という、自分が知らなかったことに気づくということに足場を置いている。つまり「私は何も知らない」という自覚が出発点である。だからまずは「知る」ことによって自分の地域像を拡大していこうという意味がここから伺えるように思う。

地域学に向き合うことは自分自身に向き合うことだ、自分がどう生きるかということだ。そこから考えようとしたとき、何も知らない自分がいた。これではいけない。おそらく、このような自覚こそが学生たちにとって総説から得た最大の成果ではなかつただろうか。仲野は学生のレポートから様々な文章を引用しているが、その多くにこのような問題意識がみられる。これが学生たちの深い思索につながっているようだ。

楽しむこととの出会いも大きかったようである。総説では、毎年、外部講師の方数名に来ていただいてお話をうかがっているが、多くの方に共通する点がある。「地域のために」という発想がほとんどみられないことだ。実際には、地域のためになっていると思うのだが、みなさん、「自分の好きなことをやってただけです」といわれる。お話の学生へのインパクトはとても大きい。仲野は「楽しむ能力」、これこそが実践の原動力だということに学生たちが気づいたという。

このような「自分の好きなことをすること」や「自分の好きな地域を他者に伝えること」が「行動力」や「情熱」の源泉であると多くの学生たちは理解したようである。ここに、「地域活性化」を目的にして行動するのではなく、「自分の好きなことを継続していくこと」や「自分たちがこの地域で幸せに暮らすこと」を追求することが結果的に「地域活性化」に繋がる、という論理がみられる。

自分の好きなことや大切なことを、丁寧に楽しみながら継続していくことが、地域学的実践に繋がる、ということを経験から突きつけられたということだろう。それが行動に繋がり、情報の発信や共有を生む。そうすることによってより多くの人とその活動に関わるようになり、個人の願いがみんなの願いに転換していく、というような理解も見られる。

楽しむこと、自分の大切なことを続けていくことがいつのまにか人と人とのつながりを生み、地域に何かよいものを加えていくという理解は、学生たちのさらなる自覚を促したのではないだろうか。地域の当事者として生きていくことを難しく考えることはない。まずは身の丈にあった、足元からの実践だ、それは自分にもできる、という認識である。

この論点の大きな特徴は、必ずしも「大きな」行動はイメージされず、ほとんどの学生が自分の身の丈にあった、足元からの実践を語っていたことだ。多くの学生たちの身の丈にあった実践のイメージも、一見非常に些細なことのように見えるが、実はその根底にはあるのは、自らの「実践」に対する学生たちの確かな、あるいは静かな覚悟の表明なのではないだろうか。

「実践」の目的を何か具体的な社会的課題を解決するというよりは、「人間の幸福」とでも呼ぶべき非常に根源的なことを達成するものだという理解がたいへん多くみられる。……その実践の

場は自分たちの「生活の場」や「身近なところ」だという「発見」も重要なことだろう。

学生たちはもうひとつきわめて重要なことに気づいたようである。自己と他者との関係についてである。そのことをうかがわせる仲野の言葉を少し長くなるが、引用してみよう。

大切なのは、様々な人びとの生きざまや覚悟、そしてそこから生まれてくる可能性や希望が実は自分のものでもあることを学生たちが自覚しているように思えることだ。

他者の可能性は自分の可能性でもある、私の苦労は他者の苦労でもある——このような視点をも提供したのが「地域学総説」だったのではないだろうか。自分の地域像（すなわち世界像）を広げること、そして他者の可能性を学ぶことによって自分の可能性をも拡大していくという経験が、多少なりともこの授業を通してみられたように思う。

そのためにこの学問が批判的に乗り越えようとしている対象のひとつが西欧近代の生み出した「自由で平等な個人と国民国家」であるが、長い間自明視されてきたこの理念を『わたし』は幾人もの他者（そして『地域』さえも）が重層的に折り重なって存在している」という人間像で批判的に捉え返すことは、地域学の基礎をなすような根源的な思想ではないだろうか。

これは自己と他者とを明確に区別して、それを起点にすべてを考えようとする発想ではない。自己と他者は確かに異なるが、その境界や壁はあいまいで、自己と他者とが行き来するような捉え方である。これは非常に興味深い人間理解であり、地域理解である。本稿の第3章までの内容と仲野の論考とを読み比べてみると、学生たちが教員と講師の話によく耳を傾けて、自分の問題として理解し、じっくり考えて、それを自分の言葉で語ろうとしていることがよくわかる。それでも、自己と他者との関係の捉え方は、授業内容をよほど深く理解し考えないと出てこないものである。

このような素晴らしい理解を学生たちの誰もが、あるいは誰かが、明確に認識したというわけではないだろう。200名あまりのレポートを精読して、仲野のなかにひとつの像として浮かび上がってきたものではないだろうか。学生たちはそれぞれがこの理解のかけらとでもいうべきものを獲得しただけなのかもしれない。そうであったとしても、地域学総説という、200名以上もの人々が集まって知的に格闘したあの場の緊張感と高揚感のなかで、集合的に、自分と地域について考える何らかの手がかりを感じとったことは、一人ひとりの学生にとってこれから生きるうえで貴重な財産となることだろう。

おわりに—今年度の成果と地域学の特徴—

筆者の論文「地域学の現在」は地域学総説4年間（2006-2009年度）の試みの到達点を示したもののだが、本年度の授業はこれに何かを積み重ねることができただろうか。大きな点だけに着目すれば、地域を考える視点として次の2点を挙げることができる。

一つ目は、長期的な時間で地域を考えるということである。これは光多報告と矢野報告が試みたことであるが、いうまでもなく、他の視点、アプローチにおいても欠かすことはできない。地域には、ほとんど変化しないか、100年をこえる長期的な時間のなかで緩慢にしか変化しないものもあ

る。また、もう少し短い中期的な時間で変化するものも、ごく短い時間で急激に変化していくものもあるだろう。このような多層的な時間から見たとき、地域はどのような相貌をみせるのであろうか。残念なことに、この視点をわれわれの地域学はまだうまく取り込めていない⁸。今後の大きな課題のひとつであるが、とくに歴史学が格闘すべき問題であろう。

二つ目は、第2部の〈生活からの視点〉である。「地域学の現在」では、「わたし」からの視点と地域を客観的に捉えようとする〈構造的視点〉、そして〈移動の視点〉という3つの視点を挙げた。ここで視点というのは、「誰もが生きやすい状態」を実現しようとするとき、どこに身をおいて、何を見据えながら考えるかということだ⁹が、今回は、新たに生活の場を加えたのである。生活者としてみたとき、どのように見えてくるのか、何が重要なのか、何が問題としてたち現れてくるのか、ということである。この〈生活からの視点〉は地域を対象化するものではない。地域のなかで暮らす当事者として地域を捉える視点である。「目安を立てて生きる視点」といってもいい。これは第1部第2節の「個人から地域を捉える」立場に重なる。人間の認識の仕方から地域性と個人の生き方との関係を考える吉村、〈わたし〉にとっての「生きられた空間」を重視し、そこから構造や関係性を捉え、生きようとする仲野、人を移動する存在として、そこから人と地域性との関係を考察する兎島、そして〈生活からの視点〉の家中。これらはみな、人の生き方や暮らしから、そこにあつた切実さや願望から、換言すれば、地域のなかにあつて地域を生きる当事者として問いを立てようとしている。まさにこのアプローチがわれわれの地域学を支える大きな柱の一つなのである¹⁰。本年度の成果の一つは、この部分を掘り下げることができた点である。

地域学のもうひとつの重要な柱は、地域を対象化し客観的に捉えようとする〈構造的視点〉である。地形・地質の観点からの矢野の報告は、いわば地域をその「土台」から考えようとするものだが、「土台」は光多のいう「地域のマトリクス」において生態系軸（地盤・地質・自然・環境）の基底部分を成している。光多の人口の推移と人の動き、経済の動きからみたマクロな地域構造の形成と変容は、矢野の研究と補い合つて、十分な説得力を獲得することができた。これは「個人から地域を捉える」とときには見えてこない構造である。

地域を対象化し、その特性を客観的・実証的に把握しようとする点では、地理学も同様である。地域学総説では藤井正（地域政策学科）が2006年度に報告している¹¹。それによれば、地理学にお

⁸ 徳島大学総合科学部の「地域科学研究フォーラム」（2010年7月1日）で、筆者は「地域学の現在」と題した基調講演を行つて鳥取大学の地域学を紹介したが、このとき考古学研究者の方から歴史的視点が欠けているのではないかという指摘をいただいた。光多の「地域のマトリクス」に図示されているように、われわれの地域学が地域を歴史的に捉える視点をもっているのは確かであるが、地域学総説ではまだ理論的・実証的検討をしていない。指摘の通り、この視点を組み込まなければ、地域学は薄っぺらなものになってしまうだろう。

⁹ ここでいう視点は、研究者に限らず、地域で生きる一人ひとりが地域での暮らしを考えるときに必要な視点である。

¹⁰ 実際には、地域研究者であってもこのアプローチを実践するのは容易でない。この問題については、高谷好一『地域研究から自分学へ』（京都大学出版会、2006年）が参考になる。

¹¹ 藤井の見解について、詳しくは筆者の「地域学総説の挑戦」（『地域学論集』第3巻第3号、2007年）と藤井正他編の『地域政策入門』（ミネルヴァ書房、2008年）の第1章 藤井正「『地域』という考え方」を参照。地理学固有の分析概念とそれによって描かれる地域像が提示されている。

いても、光多の「地域のマトリクス」と同じ様に、地域とは「自然環境の要素」と「人間活動の要素」とが絡み合って構成されるものである。地理学は、自然と人間との関わりのできる地域構造を読み解き、地図の形で記述・考察し、さらに環境への働きかけやその変化について考察するものである。地理学における地域特性とは、この各地で特徴的でありつつも共通する普遍性をもつ空間パターンとその形成メカニズムからなる地域構造とによって示される。

地理学の方法論については、今年度初めて開催された鳥取大学地域学部の地域学研究会大会での碓井照子氏¹²の基調講演「地域学の未来—日本学術会議地域研究委員会からの提言」が大いに参考になった。基調講演の前半は、日本学術会議地域研究委員会が世界の現状を分析して地域学推進の重要性を強く認識していること¹³を紹介するもので、われわれは大いに勇気づけられたが、筆者が驚嘆したのは、後半で紹介された、GIS (geographic information system地理情報システム)を用いた地理学の新しい方法である。地域学にとってこの方法が興味深いのは、これまで地表空間に存在しているにもかかわらず地図化できなかった諸要素 (の空間パターン) を目に見えるようにできることである (碓井氏はこれを「見える化」という)。「見える化」に関わるのは専門家だけではない。「参加型GIS」と表現されているように、住民自身がサイバー空間に情報を提供し「見える化」に貢献し、それを利用するのである (この意味で、この空間はコミュニケーションの場でもある)。碓井氏によれば、GISを利用した「見える化」によって、地域が抱えている問題を明らかにできるし、地域の声を聴くこともできる。それは住民が地域を自分のものにするということでもある。また、このような地域把握を容易にする技術開発が進んだことで、政策を立案・実行する前にサイバー空間においてシミュレーションを行い、政策の適否を検討することが可能になりつつあるという。そうだとすれば、これは素晴らしいツールであり、今後の研究成果が大いに期待される。

しかしながら、問題もある。驚嘆しつつも筆者にはある懸念が生じた。地表空間の「見える化」が効果的に進むことで、人の生や地域にとってきわめて重要だが、空間パターンとしては「見える化」できないものもあるということ、地表空間に現れないものもあるということが失念される、あるいは、軽視されてしまうのではないか。この点については、質疑応答の際に聴衆から質問が出たが、碓井氏は「見える化」の重要性を強調しつつ、次のように答えている。地理学は、すべて客観的に何でもデータ化したいという、客観性をとて追求する学問である。しかし、データから判断するときにはいろいろな価値規範があるので、人文学や社会科学などと協働してやっていかなければならない、と。これは地理学の特質と限界を自覚しての発言¹⁴だが、地域学に重要な示唆を与えている。

地理学の立場から見ても、空間パターン形成のメカニズムを考察するには、それが多様な要素 (分野) の関連性に関わるものであるために、学際的な共同研究が欠かせないが、地理学以上に学際的

¹² 日本学術会議地域研究委員会副委員長、奈良大学文学部地理学科教授。

¹³ 地域学推進の重要性の認識に関しては、日本学術会議太平洋学術研究連絡委員会地域学研究専門委員会報告「地域学の推進の必要性についての提言」(2000年6月)と日本学術会議『日本の展望—学術からの提言2010』(2010年4月)を参照。

¹⁴ どのディシプリンにも固有の方法論とそれゆえの限界があるだろう。たとえば、歴史学の場合、史料に基づいて実証することが大前提であるが、このために、たとえ歴史家が史料から重要な何かを感じ取ったとしても、研究として表現することがきわめて難しい場合もある。これについては、中沢新一・赤坂憲雄『網野善彦を継ぐ。』講談社、2004年、33-42頁参照。

な総合の学である地域学にも同じことがいえる。とはいえ、個々の研究者の場合、まずはそれぞれが身につけたディシプリンによって地域に向き合うしかない。その際、注意すべきことがある。ディシプリンが異なるということは、着眼点も方法論も違うということである。それぞれのディシプリンによって「何が見えてくるのか」、逆に「何が見えないのか」について十分に自覚的でなければならない。さらに、アカデミックの知と生活の知との出会いという問題もある。この出会いを通して自らのディシプリンのあり方を修正する勇氣も必要になるだろう。われわれはこうした様々な課題を克服しながら、共通目的の実現に向けて補い合って全体像を描くことを求められている¹⁵。

諸々のディシプリンの関係についていえることは、われわれの地域学を構成する重要な柱である前述の2つのアプローチにも当てはまる。すなわち、地域のなかの〈わたし〉が、当事者として、生活者として、地域をみつめる方法と、地域のありようを外から、対象化して、客観的に捉えようとする方法である。どの方法に拠るかで見えてくる景色はかなり異なる。それぞれにメリットとデメリットがある。両者の間でぶつかりあうこともある。したがって、それぞれの方法で見えてくるもの、見えてこないものをしっかりと理解し互いに補い合うよう努めなければならない。2つのアプローチ間での往復運動も必要であろう。地域学を特徴づけているのは、2つのアプローチを相互補完的に活用して、適切で効果的な政策的実践を目指しているということなのである¹⁶。

¹⁵ それぞれの科学の守備範囲と連携、その限界、そして生活の知の有効性に関しては、鳥越前掲書207-211頁を参照。

¹⁶ 具体的な実践例としては次の文献が参考になるだろう。笠松和子・佐藤由美『持続可能なまちを小さく、美しく』、学芸出版社、2008年。「世界単位論」でよく知られている高谷好一（地域研究）は、地域に関わる学問について、地理学と民俗学の紹介から始めて、2つの地域研究（area study と regional science）と地域学との違いを次のように説明している。area studyはひとつの地域を総合的に捉えようとするもので、生態学、社会学、歴史学、言語学、政治学や経済学などの専門家が参画・協同して地域の本当の姿を描き出そうとしてきた。アメリカのベトナム研究に始まって政策的なものだったが、日本の場合は、文化人類学にかなり近い。regional scienceは、地域開発を科学的に行うための手法として出てきたもので、自然科学や経済を重視している。これに対して、新たに地域学が求められているのには2つ理由がある。すなわち、土地の誇りを掘り起す必要性と、土地の人たちが中心となった研究の必要性である。この地域学の場合、土地の人が研究主体として研究に参画し、自ら誇りを見出すことが重要なのである。要するに、area studyが文化人類学的で第三者的、regional scienceは自然科学的で、開発のための技術学であるのに対して、地域学は超学術的で当事者的だということである。高谷のいう地域学はいわゆる地元学に近い。高谷好一『地域学の構築—大学改革の基礎—』（サンライズ出版、2004年）、106-108頁、高谷『地域研究から自分学へ』、118-119頁。

〔参考資料〕 2010年度「地域学総説」授業計画

■第1部 地域をとらえる視点

- 4/14 第1回 柳原邦光 「いまなぜ地域を考えるのか」
- 4/21 第2回 光多長温 「経済から地域をとらえる」
- 4/28 第3回 矢野孝雄 「大地から地域をとらえる」

- 5/12 第4回 吉村伸夫 「文化から地域をとらえる」
 5/19 第5回 仲野 誠 「<わたし>から地域をとらえる」
 5/26 第6回 児島 明 「移動から地域をとらえる」
 6/2 第7回 第1部まとめ(柳原) + ディスカッション(第1部報告者 光多, 矢野, 吉村, 仲野, 児島)

【第1回目レポート】

「地域のとらえ方について、これまでの講義(第1部)をつうじて、新たに気づいた点について述べなさい」

■第2部 地域から発するさまざまな取り組み

第2部パート1

- 6/9 第8回 家中 茂 「地域から生まれる学問－民間学・地元学・民際学」
 6/16 第9回 丹羽健司(矢作川森の健康診断実行委員会)「森の健康診断・森の聞き書き・木の駅事業」
 6/23 第10回 佐藤 哲(長野大学環境ツーリズム学部)「地域環境学ネットワークとは」

第2部パート2

- 6/30 第11回 野田邦弘 「アートが地域を再生する－地域政策のニューウェーブ‘創造都市’」
 7/7 第12回 成相 脩(『さんいんキラリ』プロデューサー, NPO古民家研究会理事長)「山陰の風土と宝」
 7/14 第13回 森まゆみ(谷根千工房)「小さな雑誌でまちづくり－谷根千の冒険」

【第2部まとめ用のアンケート(7/14実施→7/16回収)】

- 7/21 第14回 第2部とりまとめ(家中) + ディスカッション(学科担当 筒井, 中野, 児島, 岸本, 石谷)

【第3部(全体まとめ)用のアンケート(7/21実施→7/23回収)】

「次の二つについて、自由に記してください。①7/28最終回の総合討論でとりあげてほしいこと(テーマ, 講義への質問, 地域学の課題など)。②講義の進め方や感想」

■第3部 全体とりまとめ

- 7/28 第15回 全体とりまとめ(仲野) + ディスカッション(学科担当 筒井, 中野, 児島, 岸本, 石谷)

【第2回目レポート】

「第1部第2部の講義をふまえて、①自分の受けとめた「地域学」について説明しなさい(説明する相手として、たとえば家族や友人, 就職活動の面接官などを想定するとよい)。②そして、それを自分のものとして深めていくにはどうしたらよいか論じなさい。」